西遊旅譚　巻之参

LIBRARY
Brigham Young University
RARE BOOK COLLECTION
Vault
895.6
Ek12
1794
BRIGHAM YOUNG UNIVERSITY
3 1197 23947 1516

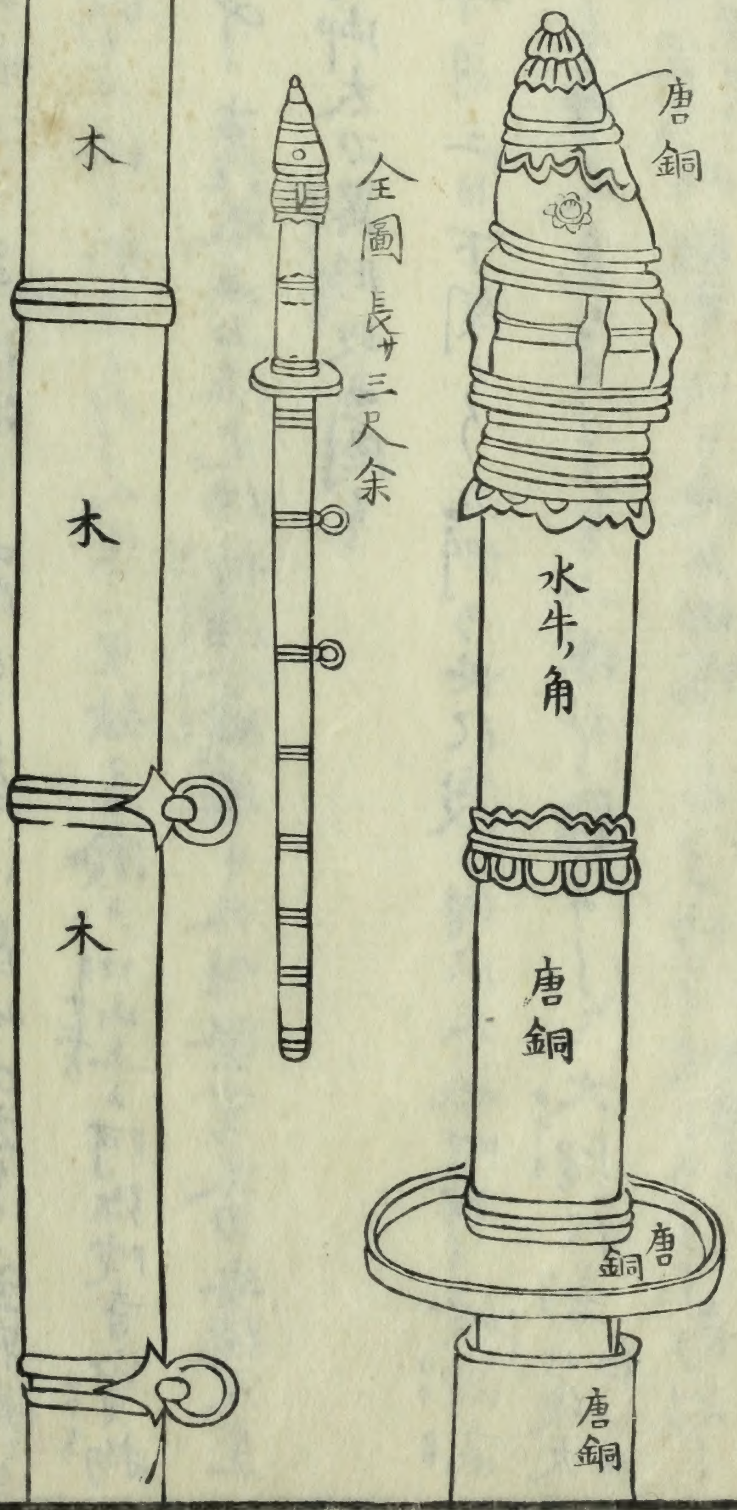
開成所藏
東京大學圖書館藏

西遊旅譚巻之三

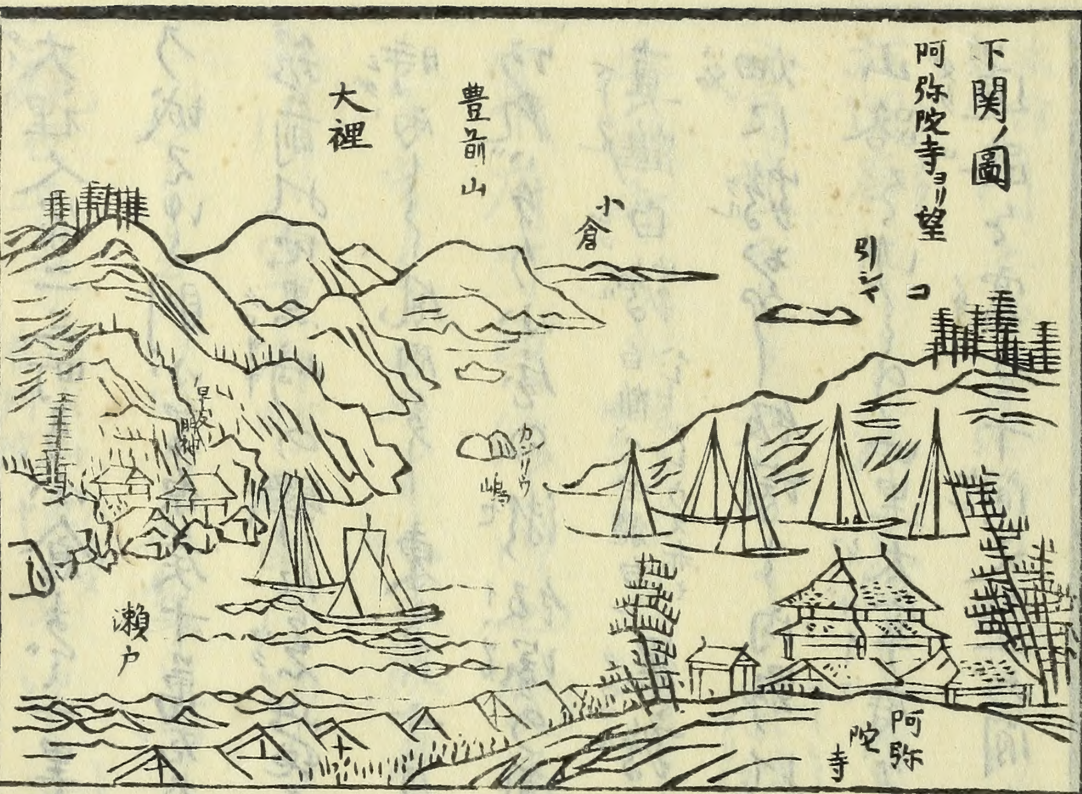
扨長府をすぎて檀浦(ダンノウラ)より赤間ヶ関に至(下関トモ云)長崎の方より玄界灘(ゲンカイナダ)を渡て此港に船をつける人家一里余なり瀬戸口(セトグチ)山上に阿弥陀寺宝物(ホウモツ)多し古法眼画土佐光信檀浦合戦(ダンノウラガツセン)図并に能登守の太刀安徳天皇の御太刀異形(コトナルカタチ)故に図す

十月三日下関より九州の地に渡る時に大風吹出し波濤(ハタウ)高し旅人色をうしなふ衛難なりしも大裡(ダイリ)に着(ツク)(此渡大裡へ一里半小倉へ三里なり)此海中にも次兵衛塚といへる所あり(船頭ナリ)秀吉の引島(ヒクシマ)にて田ノ首(クビ)ともいふ(平家の一門引退きし所の島なり)

安徳天皇御太刀之圖



UPB


下関ノ圖
阿弥陀寺ヨリ望ム
引シマ
小倉
豊前山
大裡
カンリウ嶋
瀬戸
阿弥陀寺

下関を船より眺
長州山
ガンリウ島
与治兵衛塚

大裡人家二三町より小倉まで一里半行し海を左の方に見る小倉
の城見ゆる則小笠原侯十万石の城下にて市街縦横にして夫より
筑前の地黒崎の驛に出此地より長崎の方へ行より寒くなりて
時雨して風雨多し 東方ハ十月の小六月にて東西風土に違ひ
行れバ左り小屋の瀬飯塚の間五里行り田邊川邊に鶴多し
真鶴 白鶴（白鶴ハ全體白し ハシトアシウス赤し） 黒鶴（小ニシテ黒ク頭赤し） 筑前の地總して平野田
畑に鶴おりし飯塚と内野の右の方に入田畑をすぎて
山路をゆくの四里太宰府なり此路甚の山中にして大石
道路を塞ぎ十間又ハ五六間なるものあり天満宮大なる

旅館多シ門を入て池にかゝる橋三ツかゝる過現未ノ三橋ト云山門をいりて本社左

右廻廊にして流るゝ池あり池乃辺に大楠多し毎年

八月廿一日より廿六日まで祭禮近郷より参詣多し天原山

安樂寺と云寺ニアラズ地名ナリ岩踏川社乃址の方三里に在思川

宰府町西へ流るゝ川也愛染川社の南にありて哥に

こゝろから又ぬるゝとも袂かなひとあひ川の末乃なみ

白川ハ宰府町西南にありて哥に

むかしみ乃りの道数ハ忘れ川乃こゝろむなしき老なるらむ

觀世音寺清水山普門院博多へゆく道より博多へ四里戒壇院觀世音寺

く近し都府樓の跡也又安徳天皇乃殿のありしも先年此寺本堂乃下より瓦二枚を堀出せしに生焼にして赤色伊部やきのごとしと老人の物かたりし是都府乃古瓦なり菅丞相乃詩にも纔見瓦色此寺より六七町をすぎて田乃中に礎あり方五六尺央より丸柱の象ありて總て此辺缺瓦多し表に文字なけれど裏布目あり陸奥多賀城の瓦のごとし二日市針すりを過て見る幸橋のあたり多かりしと名高きところなりしに先年なりしとゆふ四方寺山高橋沼運ぶ城跡といふ天拜天神の祠は温泉町の

上天拝山乃中程にいたり漆川　哥母

名のミにて聞ても恐ろしけりさすかに行る人ハめづらしく

其外苅萱の関乃古跡水城乃蹟の古跡を探宰府ハ四面

山繞て海ハ福岡のかたに隔たり故ニ寒月雪深しと云

夫より原田へ出て田代へゆく皆筑後乃高良山みゆる中

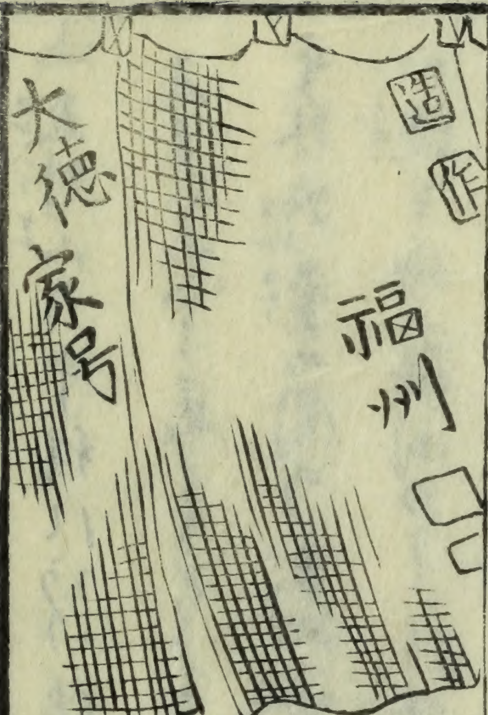
原より長山へ行路を是より十六里又久留米の城見ゆる

有馬侯の城下　中春より神崎の方喜鵲多し此辺まて高麗

烏とも又此辺より索麪を作る佐賀へ　鍋島侯の城下　城下

町二里餘人家続き冨商多し婦人乃粧の風

江戸より境原（サカイハラ）迄ハ銭一文を一まい二文を二枚（マイ）とよぶ言語（ゲンゴ）もかはりて異（コト）なり此邊過ては石乃ちびさきをたてる中春（ナカハル）ハ寒月（カンゲツ）雪を積（ツム）り二三尺小田にあまる此所農人の家ごとに暖簾（ノウレン）をかくるに麁布（アラヌノ）なり此もの支那（カラ）より荷物を包（ツヽミ）来（キタレ）る莚（ムシロ）なり圖のごとし



夫より成瀬に至る又塚崎へ行道(ユクミチ)より嬉野(ウレシノ)茶ヲ出スより彼杵(ソノキ)

此間大山坂有り緩くして大村に至る十町ばかり左右家中屋敷の

半は桜を植(ウエ)て是れは大村城下人家續く十日九日市(イチ)

街(マチ)戸毎(コゴト)に注連(シメ)を張香を焚(タキ)燈(トモシビ)て是れを祭る此地疱瘡

をきらふ此所を西国流行(リウカウ)(ハヤル)もの除(ヨケ)んがためと町人いふ

此より舟にて内海(ウチウミ)にして小島多し景又佳(ヨシ)長井といへる

所より七里舟よりあがり行事十余町時津(トキツ)に至る大村ノ領地此所(コレヨリ)喜々津

へ三里鯖腐石(サバクサラカシ)道端(ミチノハタ)にあり中野村平野村などいふ所の

路(ミチ)常の犬をみるに皆狆(チン)なり小童(コドモ)多くは筒袖をきる唐人風(キル)ニウツル

鯖貝腐石数丈に聳へ
上の石危く懸る
土民の口サバ貝といへる魚を
荷て

山中大石に
仏をきざむ
手際入
なり

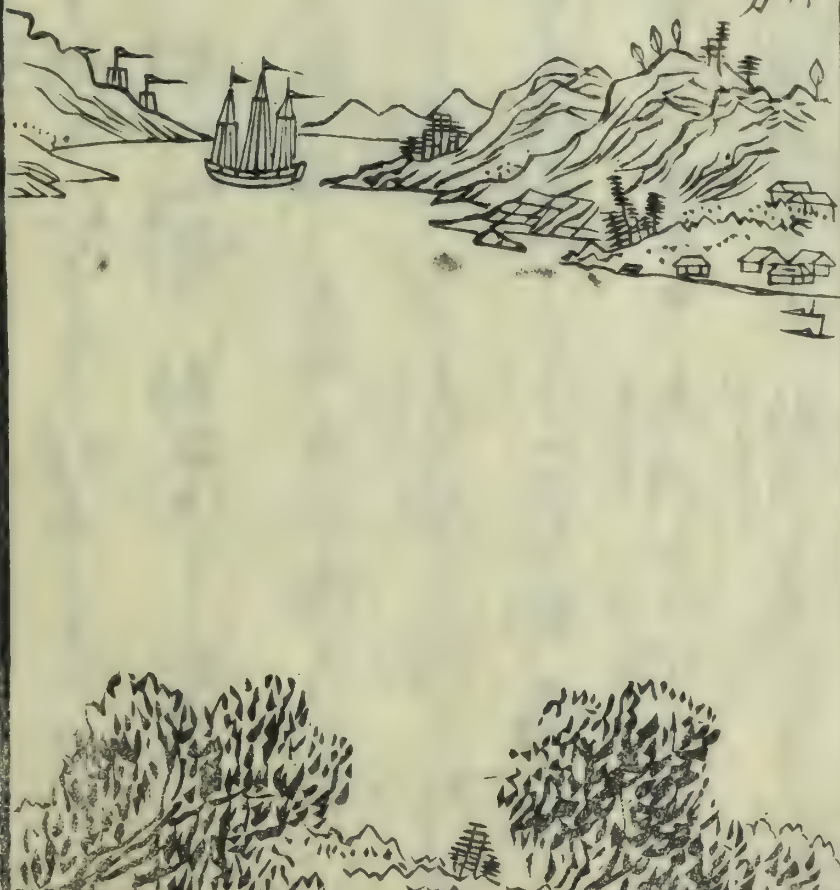
又石階多し大石に佛を刻たるもあり村ちと家胡羊豚
雞を畜ふ長崎市中唐人和蘭に售西坂より長崎を見る
坂より下りもの長崎へ入し数日留る長崎市中海岸の家とつる
故ふ石階多し又橋も石もて作婦人は生涯眉を剃ず指にかず
輪をはめ（唐人ノ云ナリ）言語いろし放言いへと一二を載兄○バボウ
姉或は娘を○ゴヽ人の妻を○ヨカウサン色情を○相思（唐韻ナリ）踏
壇石を○キンバ皿を○バセウ遊里など散歩を○ス子フリ番椒
を○コシヤウ物を與ふるを○シケンカアジイ是ほどを○コレシ子餘程
を○ヤツト親父を○チヤンとふ又言の中に○バツテンとふのみ

蘇鐵(ソテツ)多く茂りて風土暖(アタヽカ)にして寒月雪稀にして園中に橙(ダイヽ)ヲ植(ウエル)

酢ニ用ユ 琉球芋(リウキウノイモ)多(オホ)し 赤白二品有 赤蕪(アカナブラ)多く大根ハ細(ホソ)くケラノ尾といふ

西坂より長崎を望 旗(ハタ)を多くたてるは紅毛(オランダ)出舟し 来る尓支那(カラ)船二三艘なる 紅毛船ハ八月湊を出て一里を 隔(ヘダ)て高崎にかゝる 支那人館(タウジンヤシキ)ハ十善寺といふ低所(ヒキヽ)尓 ありて

稲作方



山に田畑を作る

支那人館ハ十善寺といふ寺ニアラズ地名なり中に社稷を祭又関帝
堂あり帝命を奉じて渡海する者古ハ范氏中ハ王氏今ハ
銭氏の人来る此外十二家あり是を自分一己の交易に
渡海を営む蘇州の人也則蘇州ハ日本凡大坂の如き地なり
しき南京第一の繁栄の所なり今ハ七八艘のミ渡海
して十二艘と定めし程赤城といふ所の浙江のうち
乍浦といふ所凡人足十五年以前より長崎へ来る
又方西園といふ者ハ画を好ミ八九年以前より渡海す福
建の人なり此外周壬禄宋敬庭の如き数年渡海して

少しくも書畫（シヨグハ）を作（ナサ）ゞるものあれど其名をきくにいとまなし
草亭（サウテイ）撲庵（ボクアン）宕山（タウザン）可亭（カテイ）皆書をよくし伊孚九（イフキウ）山水の画
あり皆此輩商賈（シヤウコ）にして交易の餘暇（ヨカ）此技（ギ）あり　日本に
商家にても哥俳諧（ウタハイカイ）書画を学ぶものの多し是に比（ヒ）すべし
能画（ノウグハ）能書（ノウジヨ）或（アルヒハ）文雅（ブンガ）を賞するなれども其うちに沈南蘋（シンナンピン）一人
能畫（ノウグハ）にして画師なり又近年来りける方西園ハ交易に
疎（ウトク）ぬれど画をよくせり多くハ水墨（スミヱ）にて着色（サイシキ）なし其師也
とかる者周西山名ハ選（セン）此一人ハ北京（ホツキン）の産（サン）にして遊歴して南（ナン）
京（キン）より渡（トヾ）り頃（コノゴロ）長崎へ来る此者一人ハ文雅の者にし能書畫（ヨクシヨグハ）

をとゞめて百日をすごし帰帆せし官を避るゝ為に南京寺或悟真寺にして度々應對して書畫をもらふ又此方よりも画など贈る總て支那人は日本人にかはる事なし志をむすぶ似より雅も又俗もあり又顔面日本人のごとし只衣裳のかはりたるのみなり

支那人之圖

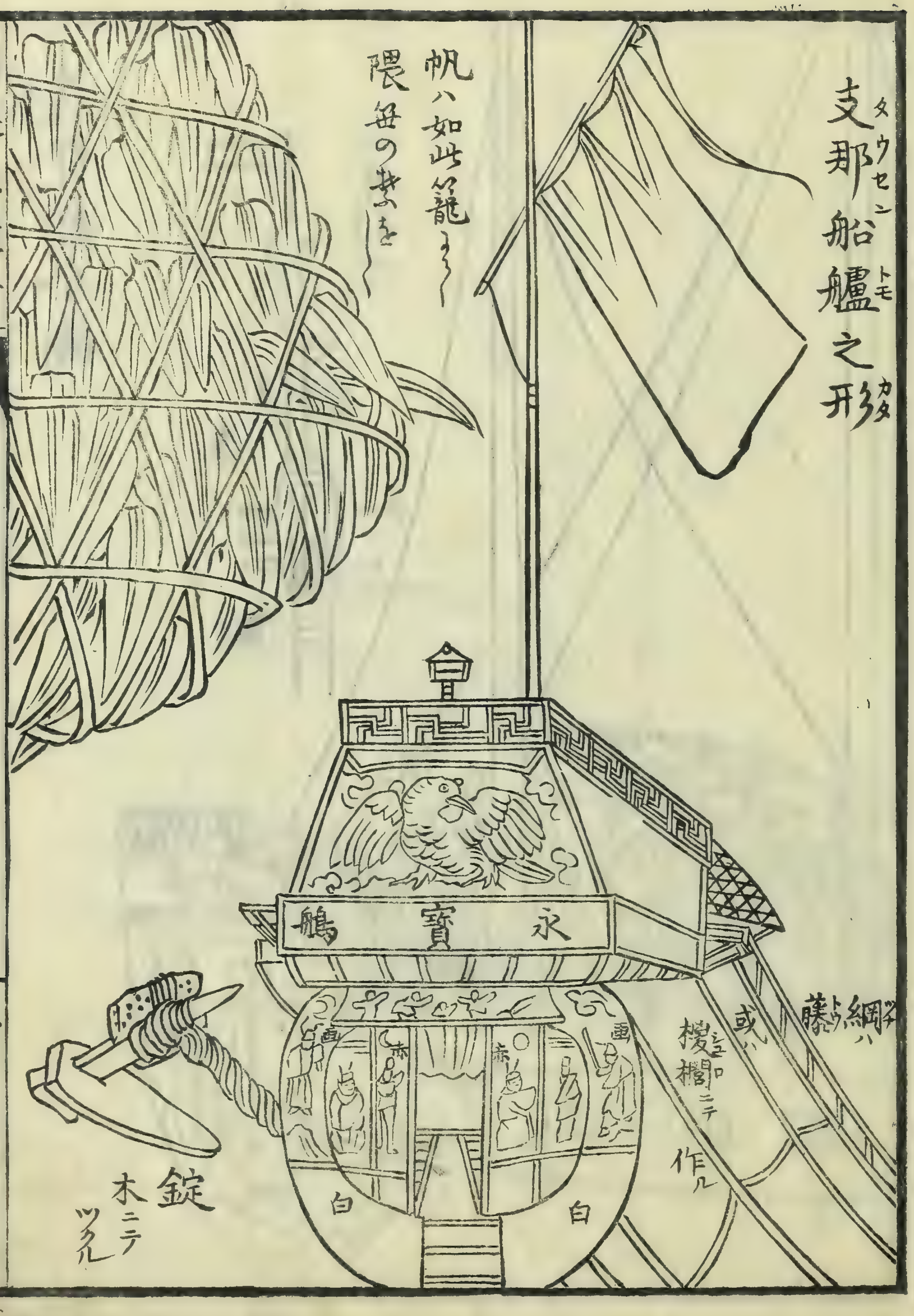
明亡今於清の代となる乾隆五十三年也風俗如圖頭ハメグリヲ剃テ中バニ髪ヲ置

乾隆帝天下を巡狩する事四度歳九十餘
しと云

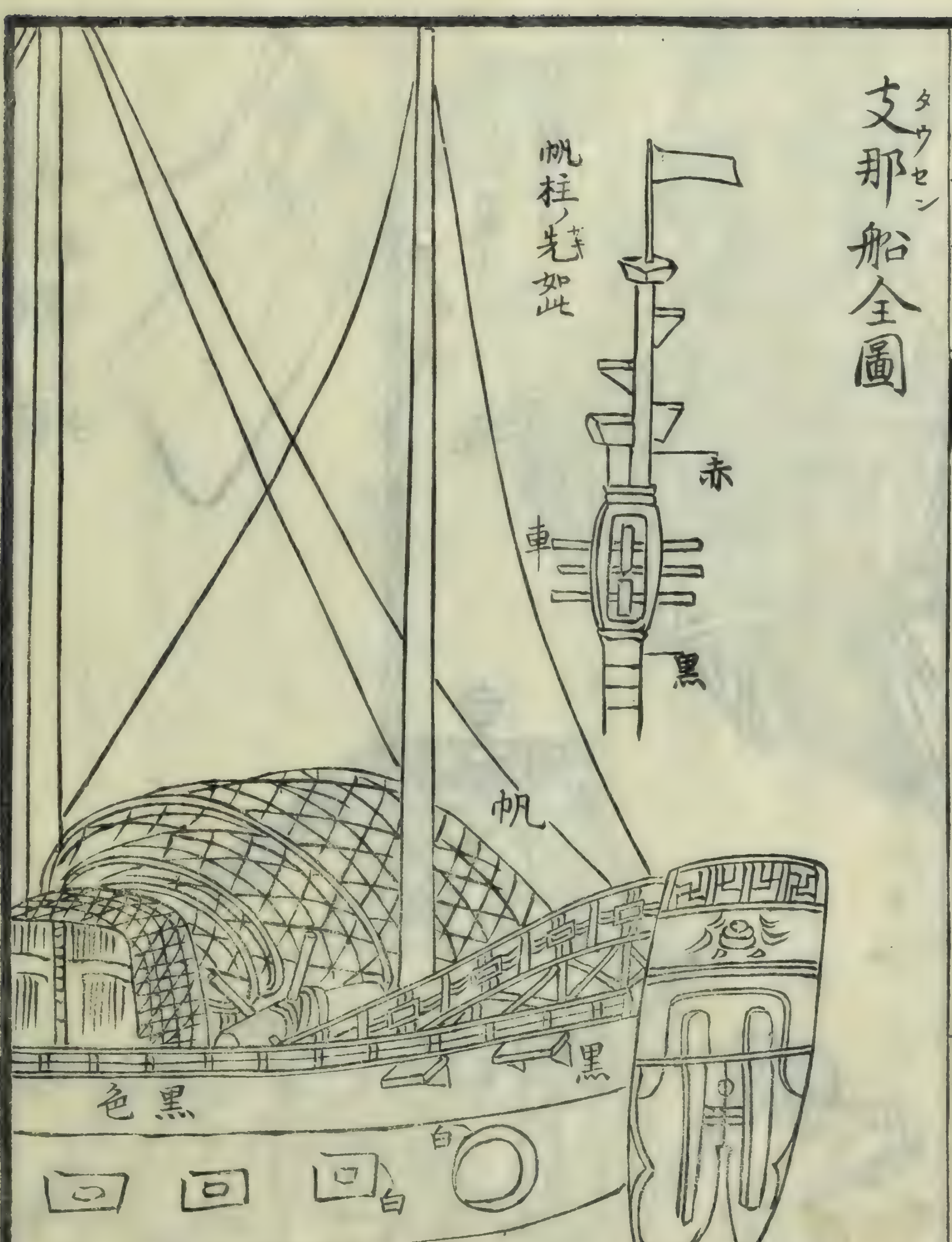
露臺之圖　夏月涼所

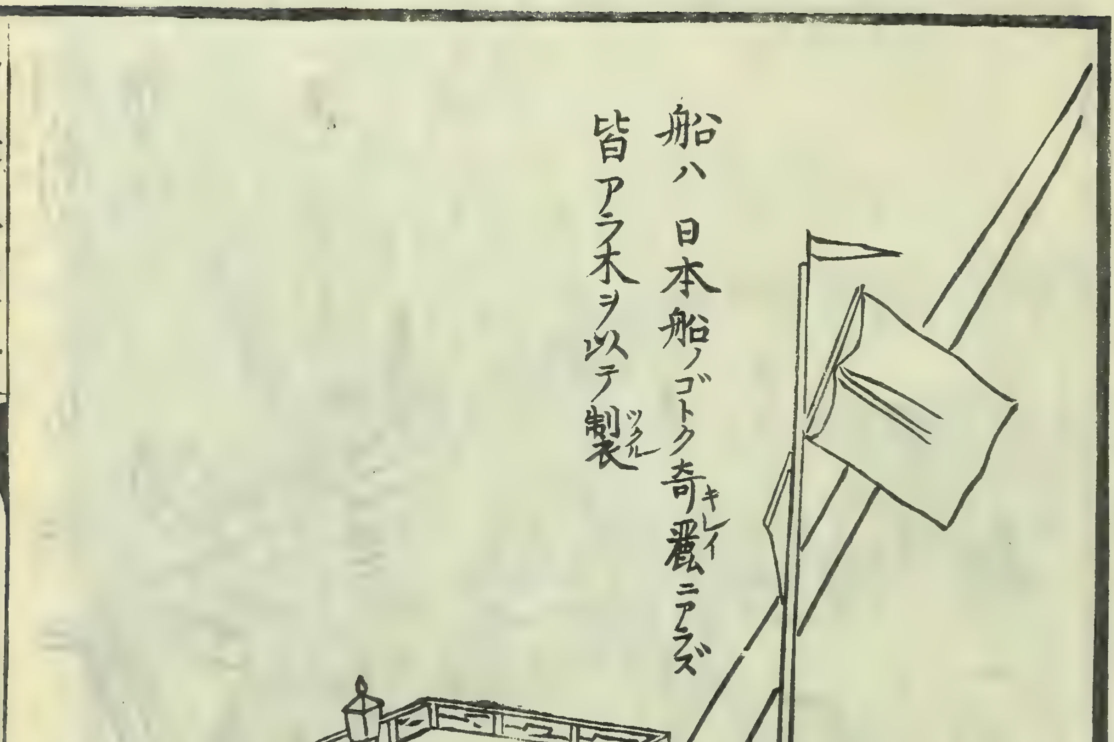
支那人居宅ハ日本より家を作りやす
旅ゆかりよる作りやうよし　日本のかし
容あしまうるまる所ハ毛氈を敷也

支那船ハ梅ケ崎ニ着する船の
大きさ十五六間もあり帆ハ布にあらず
藤を以て籠のやうにつくり内に隈
笹の葉を布き錠て木を以て
製艫乃く万人物或ハ鷲の類
を粉緑を以て彩画事甚
俗なり一段外を黒塗にして
四角なる形を白く画是ハ揃郎
機の形を画にかきしるしたるもの也

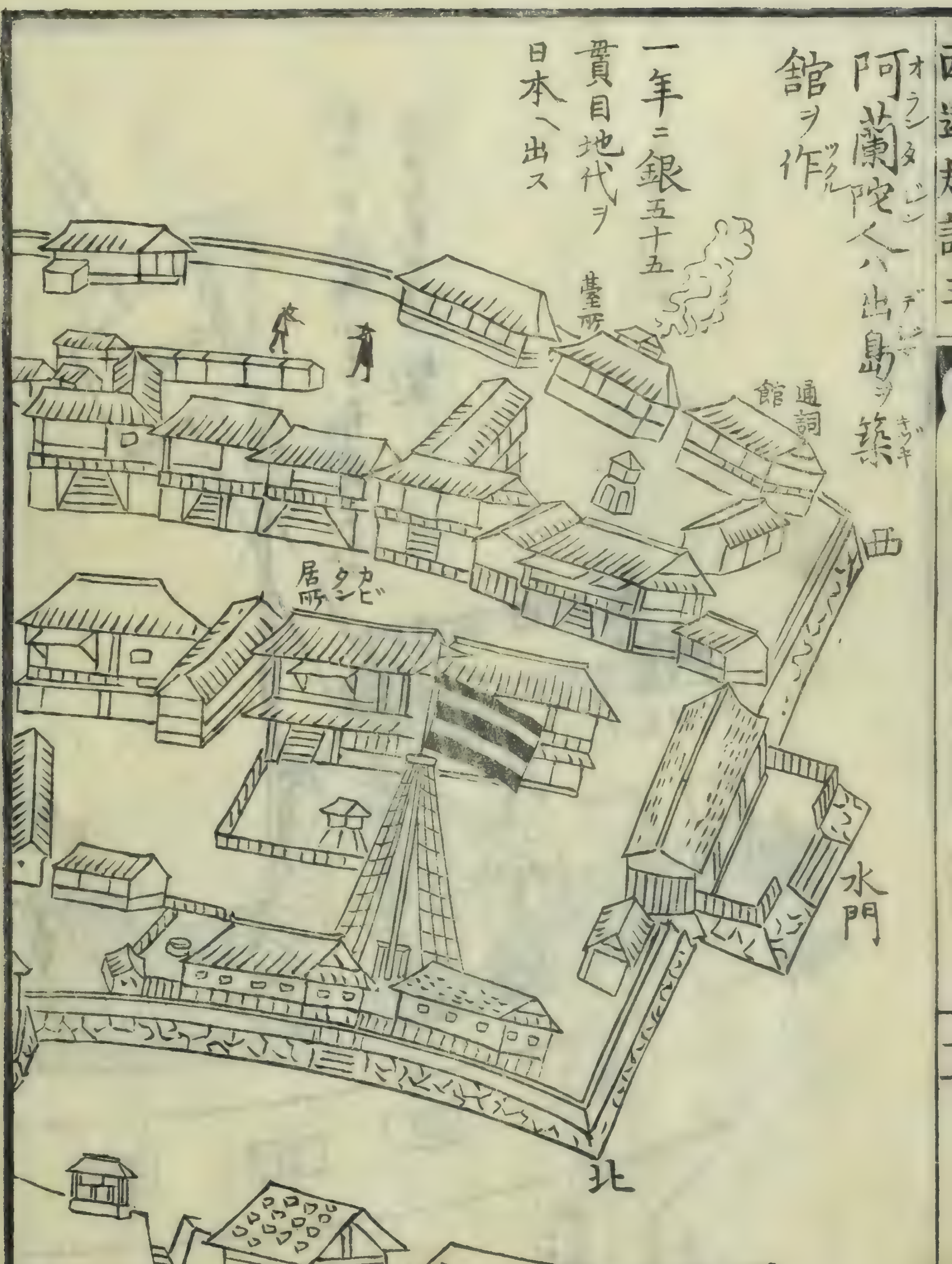

支那船艫之形
帆ハ如此籠ニシ
隈毎の巻をし
鷁寶永
綱ハ藤カツラ或ハ棕櫚ニテ作ル
錠
木ニテツクル
白
白
赤
赤

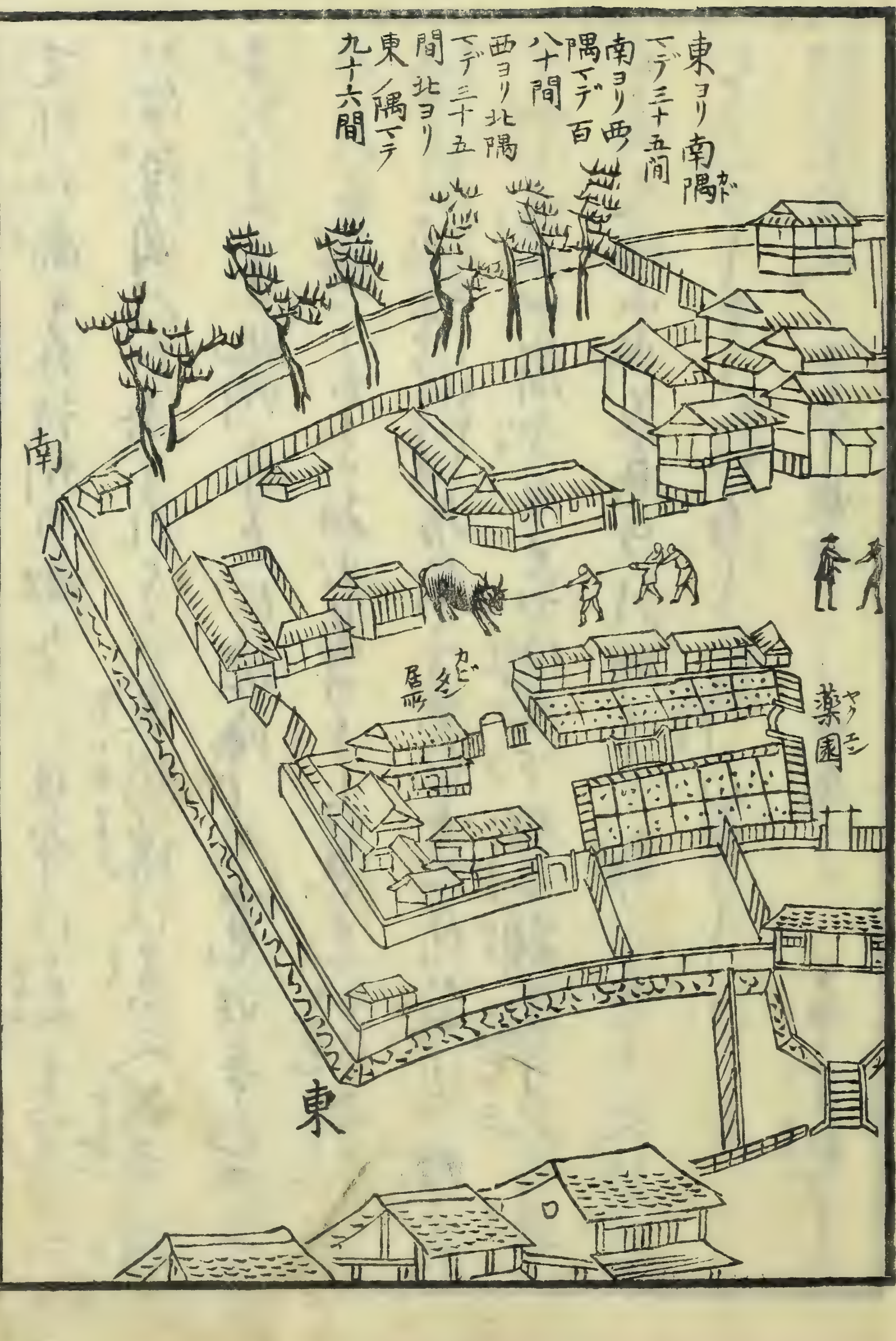
支那船全圖





船ハ日本船ノゴトク奇麗(キレイ)ニアラズ
皆アラ木ヲ以テ製(ツクル)
竈
是ハ拂郎機(イシビヤ)ノ
カタチヲ胡粉
ニテ描
タルナリ


阿蘭陀人ハ出島ヲ築
館ヲ作
一年ニ銀五十五
貫目地代ヲ
日本ヘ出ス
臺所
通詞館
カピタン居所
水門
北
江戸町


東ヨリ南隅(カド)マデ三十五間
南ヨリ西隅マデ百八十間
西ヨリ北隅マデ三十五間
北ヨリ東ノ隅マデ九十六間
南
カピタン居所
ヤクヱン
薬園
東

支那和蘭より外諸州の船を　日本に着ることなく
は伊勢国の大湊それより泉州堺に着又筑前博
多みなとより肥州平戸に渡海して寛永辛巳の年
今の長崎といへる出島のうちカピタン（カピタンハ日本にて唱ふる名也）
（彼国にてはヲッペルホウフドといふ其家の頭といふことなり）居所二ケ所にて一ケ所は外より階子に
て登楼上四五間方なる所欄間下硝子額数十品を掛る
其画人物山水花鳥の類めきて動くがごとし又椅子
をとりすゑなどいろいろの飾ありしと
阿蘭陀人　日本長崎より本国まで　日本里数にして

一萬三千里ありしにそうるときハ二千四五百里隔る
ず此日本よりハ西に離りて少よりハ暑き事もなし故に冬月
といへども米穀を生せざれバパンといふものつくる或ハ牛肉をもつて食とし故に印度
亜諸州に船を廻し交易をもつて第一の國勢とし○イス
パンヤ○フランス○イギリス○アルマニア○ホウレン○モスコビヤ（ヲロシヤと云）此外も
皆エウロツパの諸州にして○ヲランダもして諸州に渡りて交易をなし
てワづかの所を潤ひと務る國なり　余り知るものとも地球圖崑崙奴ハ
彼國の詞にしてハスワルトヨンゴと呼ジヤガタラの人なり　ジヤガタラハ赤道直下の國
扨又其の阿蘭陀人の下奴となりて来る事も生色黒
熱国なり

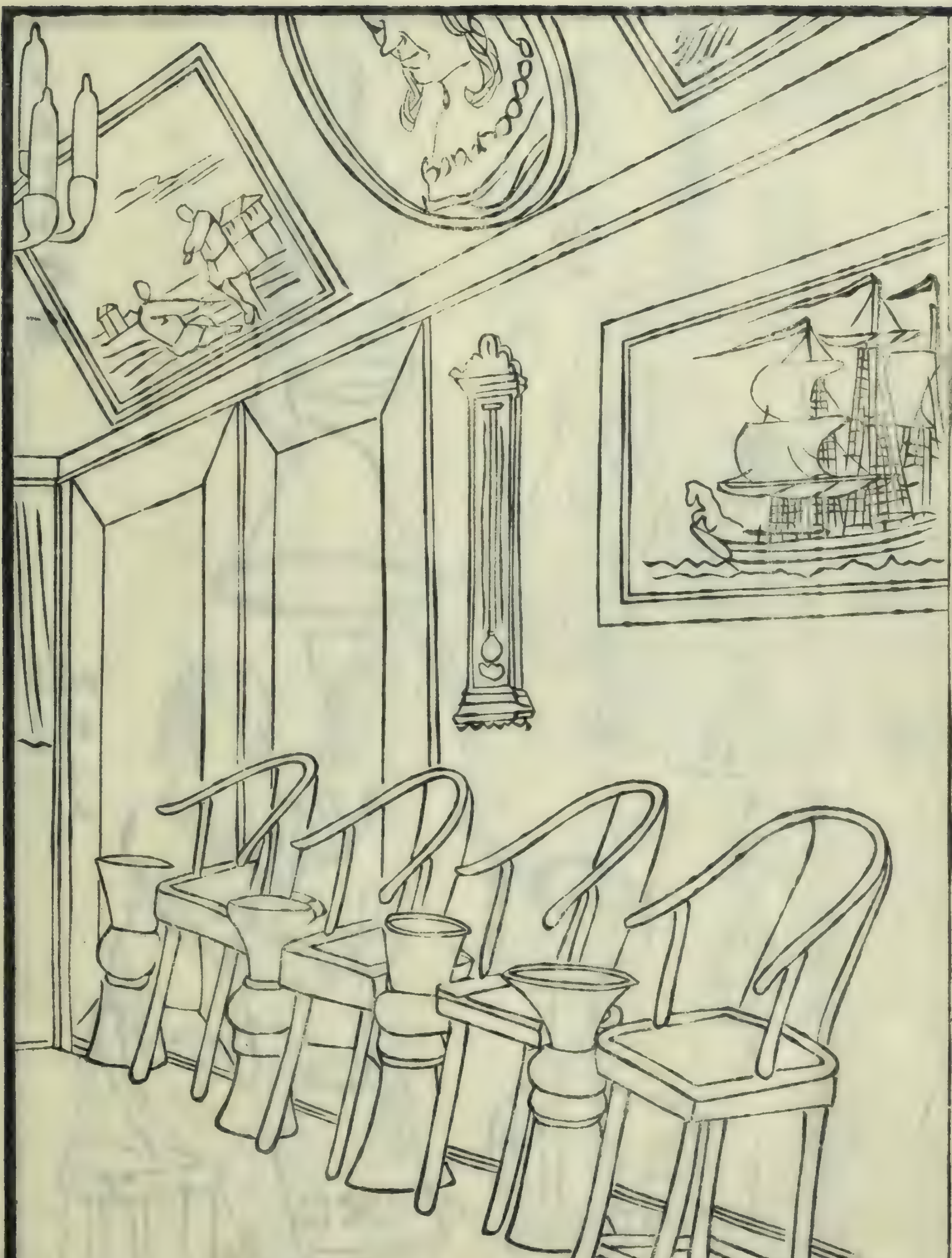
はしばしいでゝも墨にて斑(マダラ)にぬりたるもあり又黒(クロ)ぬり
けるもあり夏月ハ躶(ハダカ)にして袈(ケ)裟(サ)のやうなるものを纏(マトフ)者き
ベンガラ縞(ジマ)なり冬月ハ和蘭(オランダ)より衣服をもらひきるこれハ紅(オラ)
毛(ジン)乃衣服のごとし羅紗更紗(サラサ)などにて作る頭ニ巾(キン)あり
世りクロンボウさへ淺ましきものゝ是なり
ニタロスといへるものあり是れハ船中乃水主(カコ)なるもの、かく事
船の中にて雑用をなす水練(スイレン)をよくするもの也(クロンボウに劣るべし此ニタロスなり)此ものハ阿蘭
陀本國の人にて言語も和蘭の辭(コトバ)なり顔色(ガンシヨク)ハ
白く髪(カミ)ハ茶色目の瞳(ヒトミ)赤し十五六歳のもの

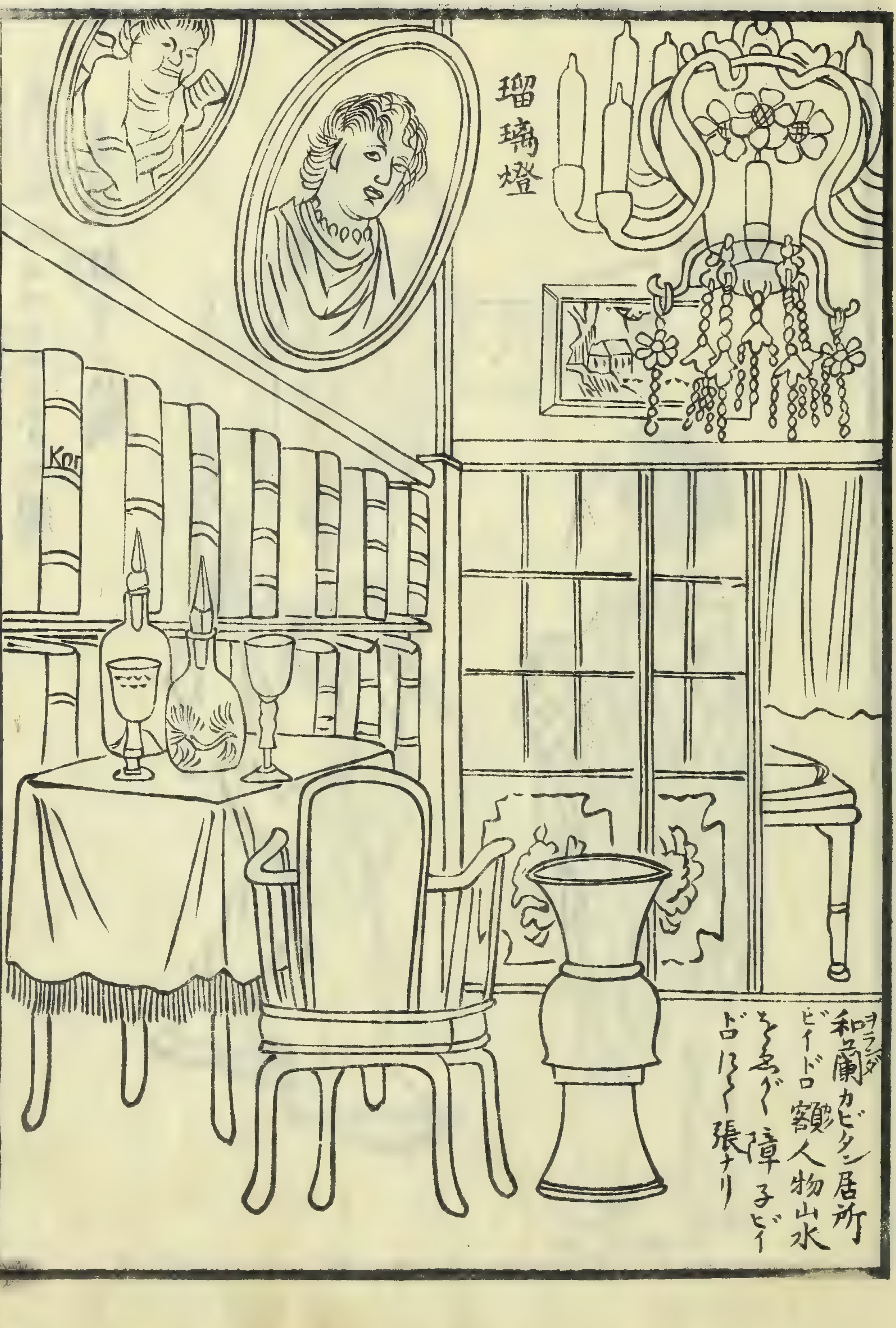
散髪衣服阿蘭陀のごとし此でタロス帆ばしらにのぼりてあそぶ身のかろき事猿のごとし

和蘭船ハ大サ四十間表の方獅子を作る總てチヤン塗にして黒し艫のうしろ家形作り内に入ば玻璃障子前に天幕をはり地球天球をおき半に梶を廻らす車ありその左右に水壺をおき帆をはる三所に建たり下に入ば拂鳥檣二千五左右に行ありて朝暮両宛ためし又十二三もそれの事有り是を祝事にそれの事とし彼國風なり　船とゝのへるの事あるとき長崎者の杜撰なるとなしとかや　又洋中に出ては

要害となる事なるへし故に深く穢を斬じ去る事
まして此國ハまして火をもつて浄るよし其音山に響く
霹靂のごとし荷物も船乃底の積ミ竈までおさめて
桐を出せる所なり其下に入焔硝を貯へ置ぬ總て船とチヤン
まして塗る所の物ハ皆燃やすきものなれハ壽命を減し又燈し
消火もつおこらん是を守れハ通せられしなり故にウヱンドルと云
具を製し守を通せしむ支那の船乃粗なると阿蘭
船の精ハ甚乃ちがひなり

ウヱントル之圖

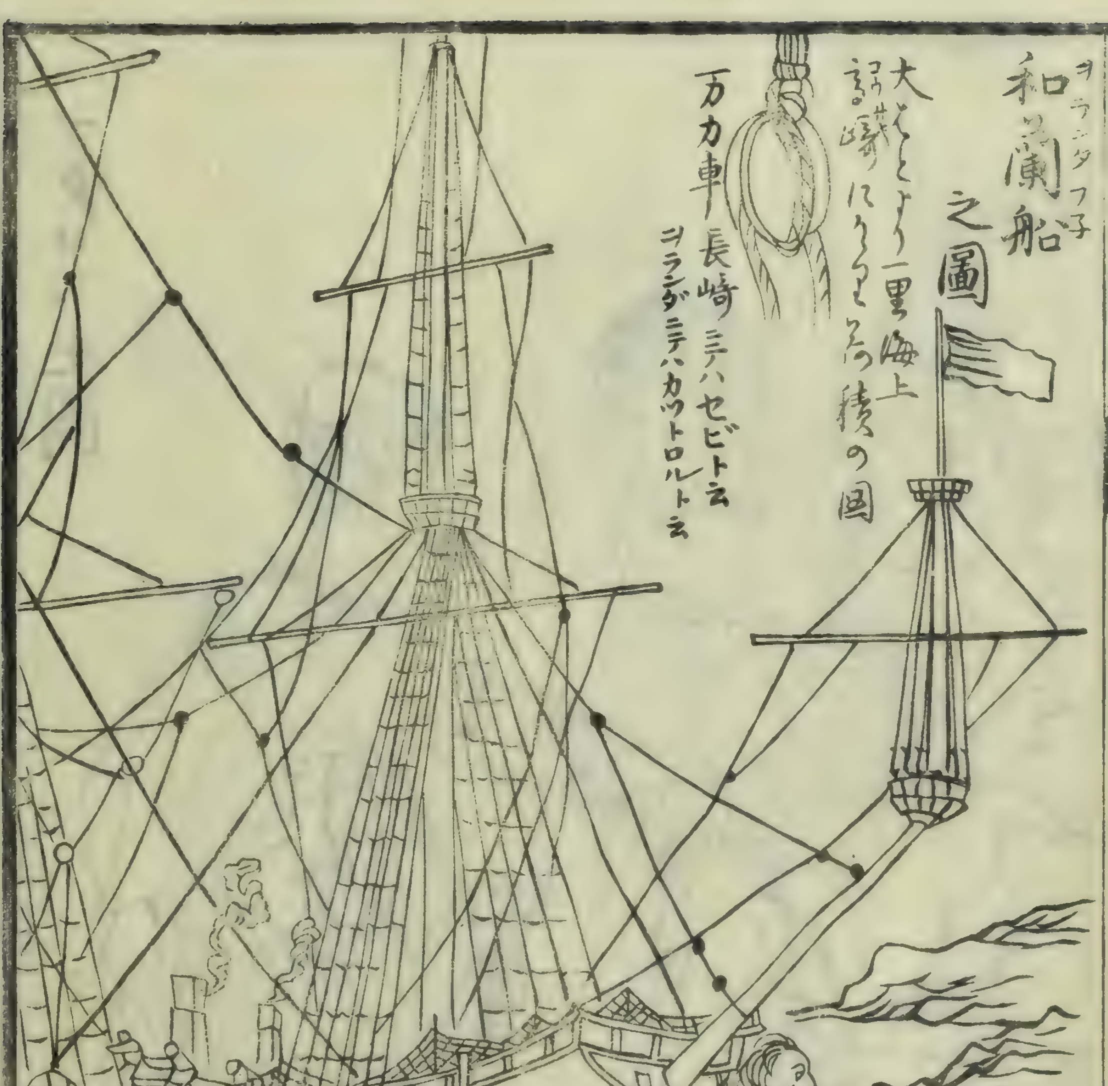


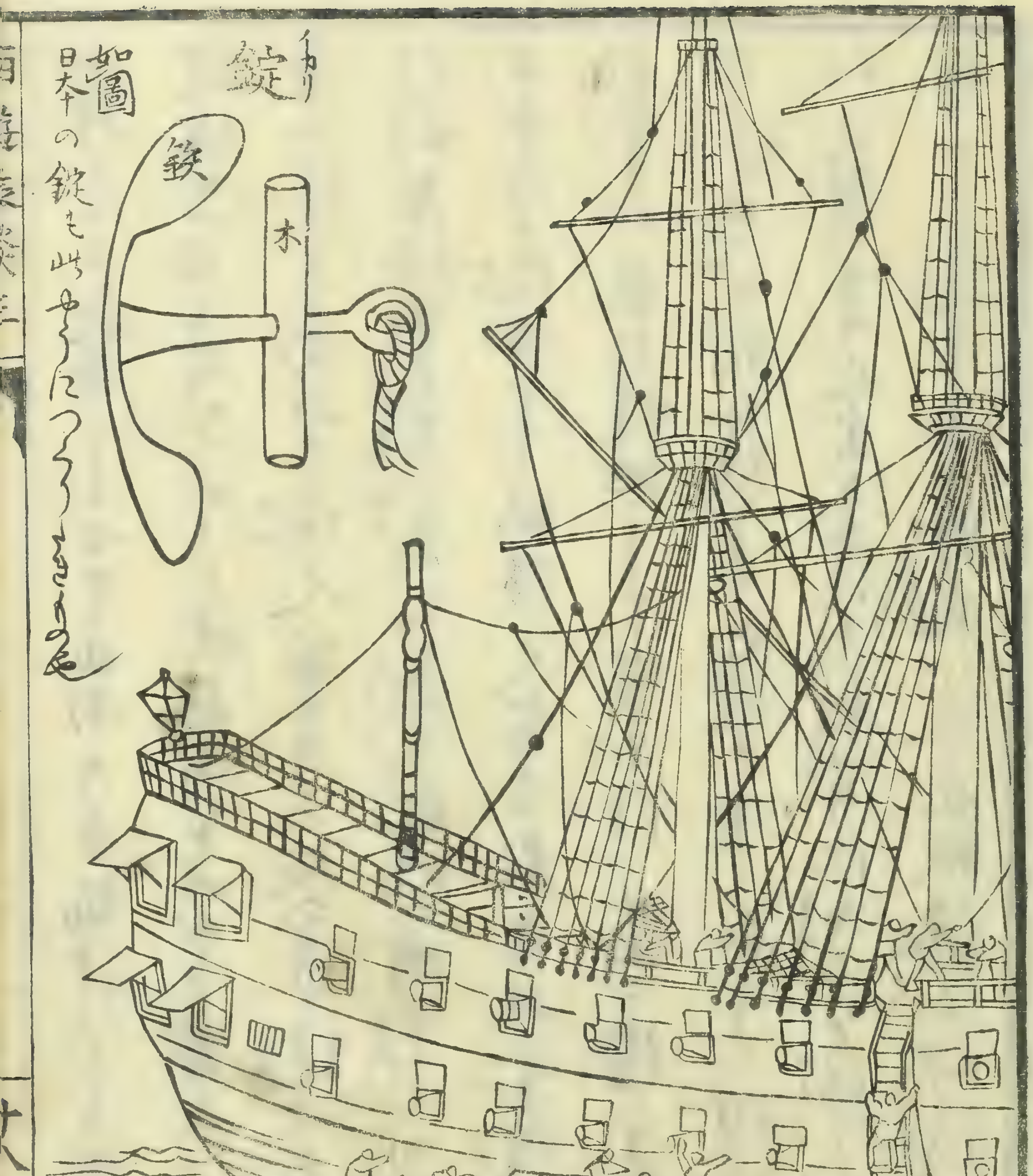

瑠璃燈
和蘭カピタン居所
ビイドロ寄額人物山水
ゑがく障子ビイ
ドロにて張ナリ

崑崙奴(クロンボウ)スワルトヨンゴ之圖

夏月ハ躶(ハダカ)冬月ハ如圖

マタロス之圖

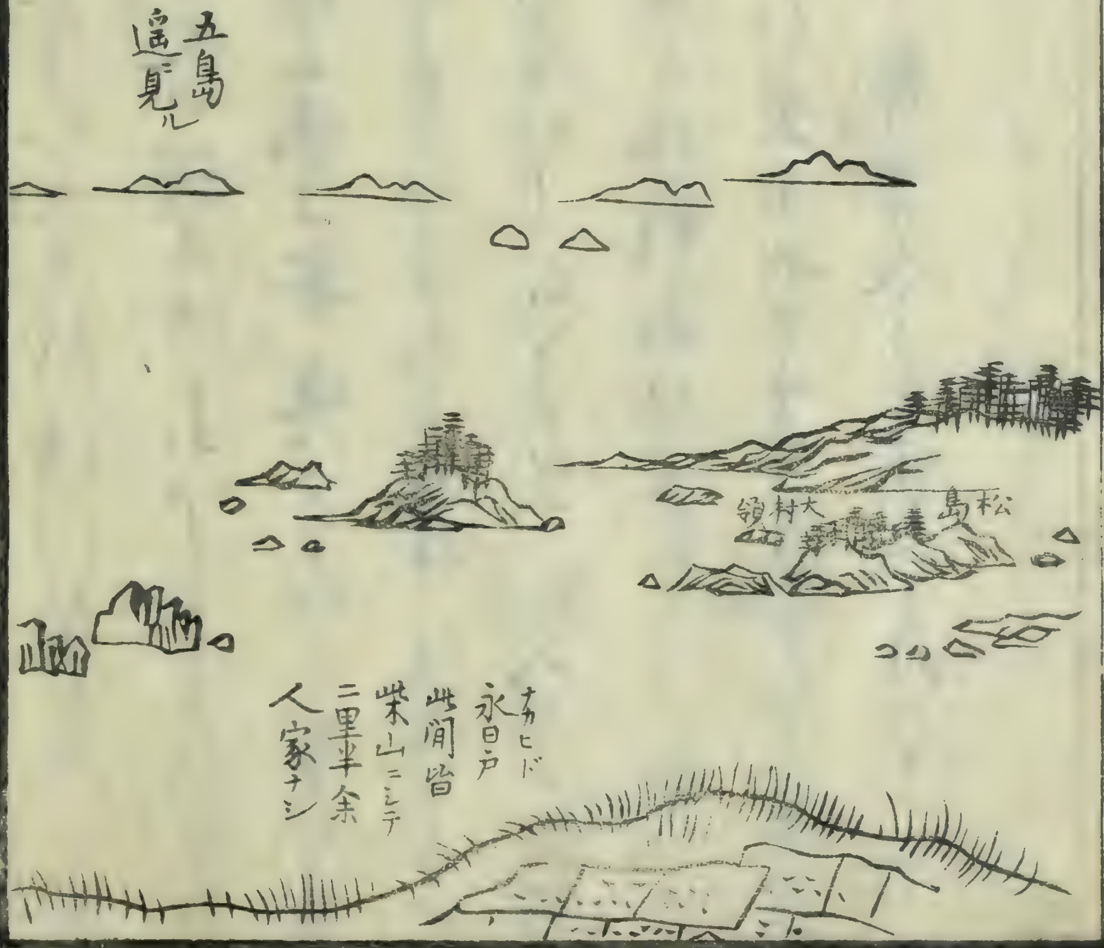

和蘭船之圖
大きさより一里海上
万力車 長崎ニテハセビトト云
ヲランダニテハカツトロルト云


イカリ
錠
如圖
日本の錠も此やうにつくりたるなり
鉄
木

十月十二日長崎より七里西南の方脇津と云所より戸町
深堀なとゝ云所を過て路山をめぐり岩石を踏行
事二里半余山の頂人家なし右の方遥に五島を見
是ヨリ四十八里
左の方天草島又島原肥後の國見て向所此國無
日本の絶地なり脇津人家百軒余此辺琉球芋を
食とし風土暖地にして雪不降サボン橙の外奇草を
作る」廿八日朝五時より大波戸より舟にて稲佐悟真寺
に支那人七十人余も来り船岸に近くを待て太鼓笛を吹
寺まで送る其うち夥長八人衣服繻子紗綾の類色々

黒き余下人ハ鼠色木綿也大通辭清川榮左衛門下通
詞吉島左十郎　支那人曰我等佛氏にいましかれ寺も
大破に及ひて夫故砂糖三俵を寄進いたすべし然れとも
住僧此身持不正ハ當寺にいらさんと通辭住僧を呼出
し此事をいひける老僧かしらをさげて恥入たる躰
ハ程赤城費精湖周壬祿程敬倫のならひて卓子
盤四人にて席をさだむ余も共に坐して食ス又画を
描けれハ姓名を尋る　都の人と云ひたれハキンジン
キンジンと呼たり

長崎より時津へ行路左右海をのぞむ其右乃方を圖海上小島多し

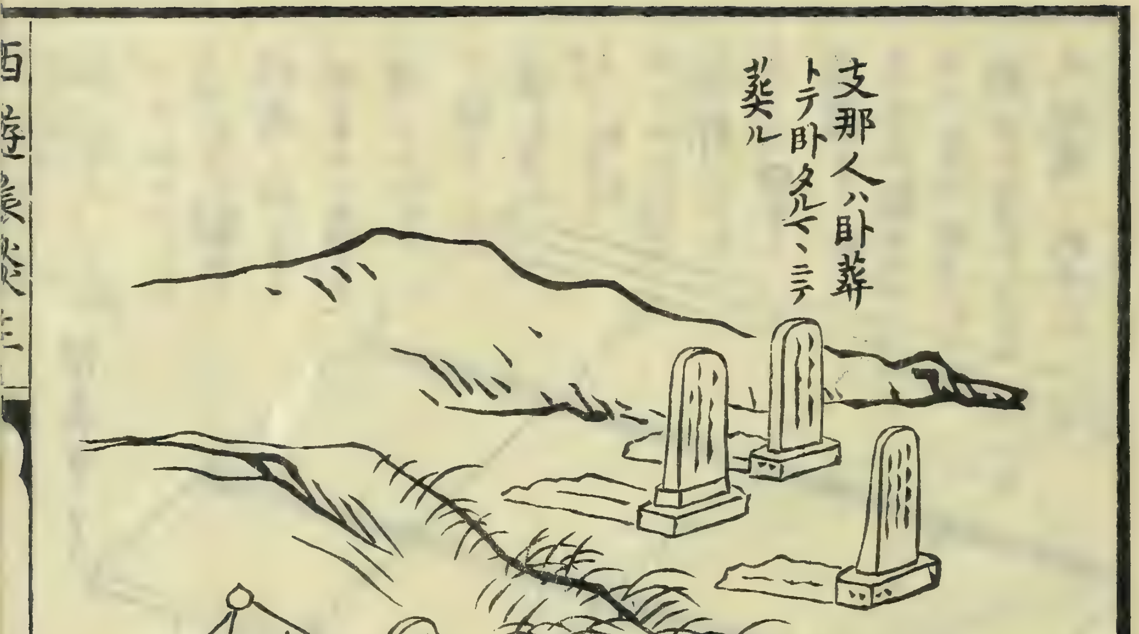


五島城下

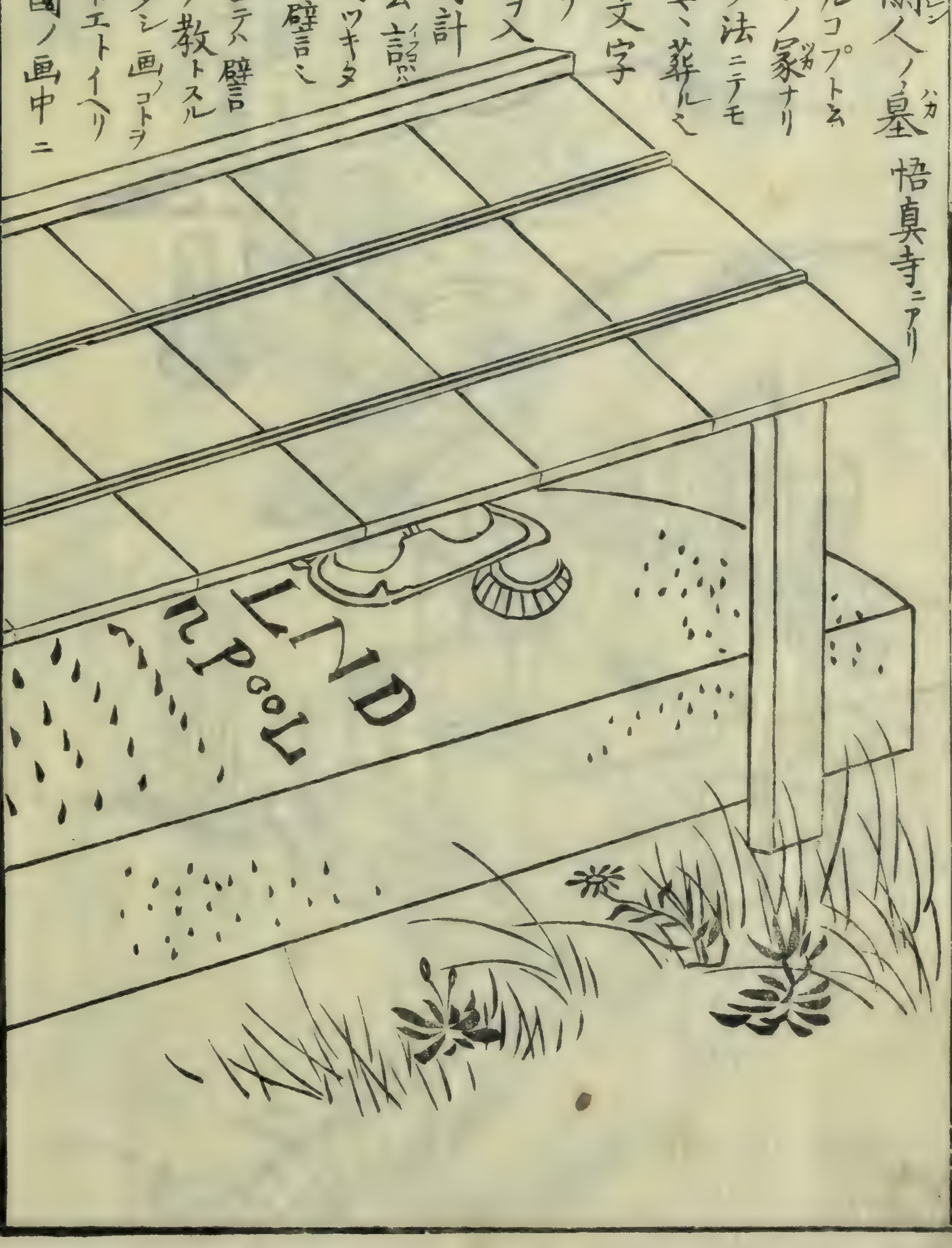
長崎ヨリ七里
西ノ方脇津
此所ニ三崎観音アリ
長崎ノ者多参詣ス
五島
遠見ばん
脇津
芝山ニシテ木ナシ

肥後
椛島
カバシマ
觀音堂

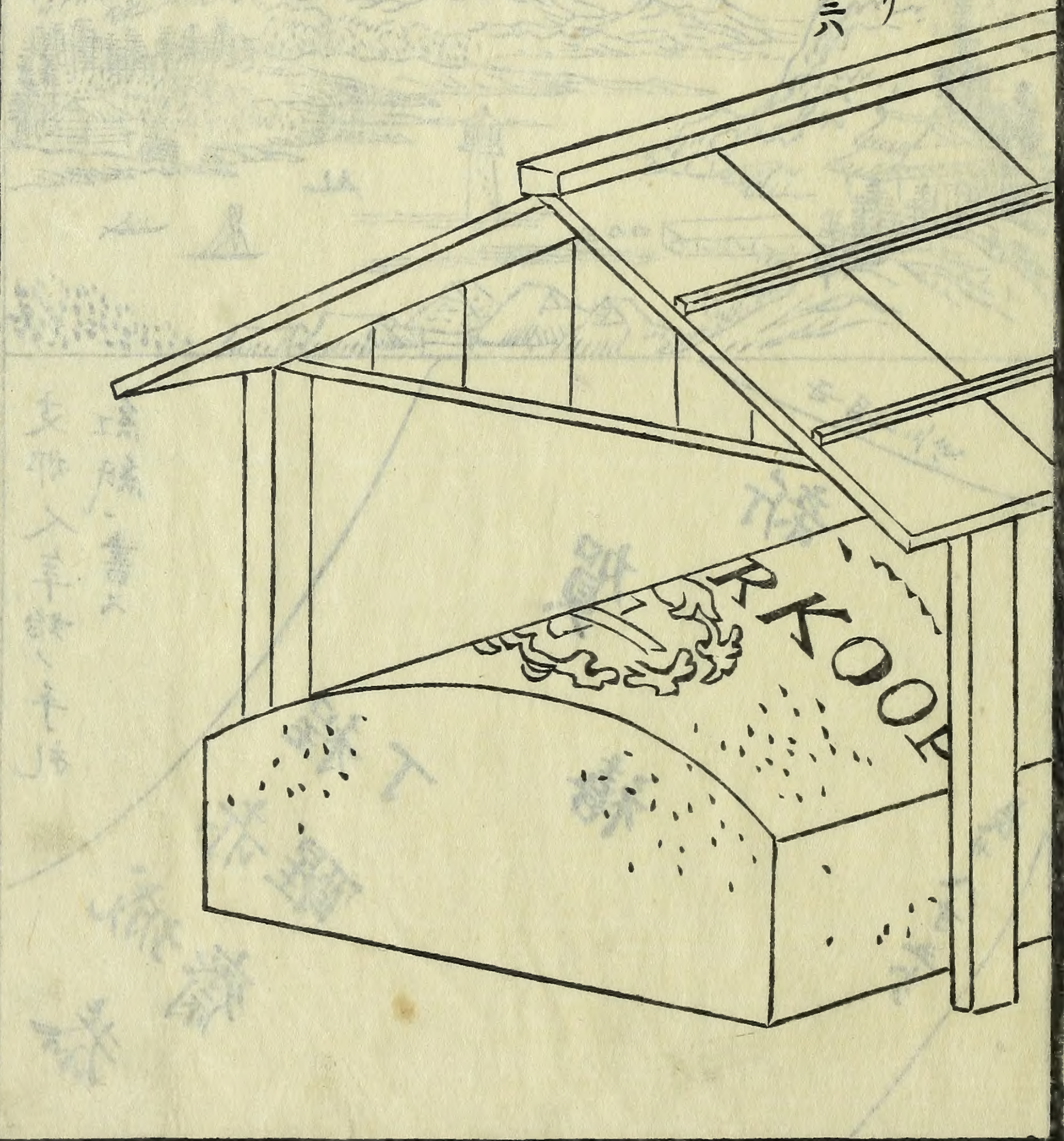
悟真寺支那人之墳墓

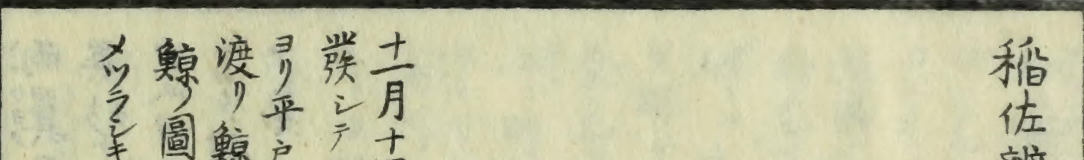

支那人ハ卧葬
トテ卧タルマヽニテ
葬ル

和蘭人ノ墓 悟真寺ニアリ
ヅウルコプト云
カピタンノ冢ナリ
彼國ノ法ニテモ
卧タルマヽ葬ルヽ
碑ニ文字
ヲ彫テ
金色ヲ入
上ニ時計
ヲキザム 諺ハ
漏刻ワキタ
ルト云壁言シ
波國ニテハ壁言
ヲ以テ教トスル
コト多シ 画ノコトヲ
則タトエトイヘリ
又波國ノ画中ニ



兩翼アル人物或ハ異形ナル圖アリ皆タトヘヲ画シタルモノナリカツテ羽ノアル人ノアルニハアラズ





十二月十四日長崎ヲ發シテ三里時津ヨリ平戸島ノ方ニ渡リ鯨ヲ見ル鯨ノ圖ヲアヌスシメツラシキコトヲ話

支那人年始ノ手札
紅紙ニ書ス

卷之三終